

## 第5回

書道監修・執筆 加藤泰弘

## 石に刻んだ書 ～世界遺産・龍門石窟～

## 今回学ぶこと

今回は今から1500年以上さかのぼる北魏時代ほくぎに刻された「牛欄造像記」ぎゅうらんぞうざうきを臨書する。これは世界遺産にも登録されている龍門石窟りゅうもんせつくつの古陽洞内こやうどうに刻された書。刀で彫られた点画は直線的で角張っておりほうひつ（方筆）、独特の気迫が感じられる。この切れ味のある筆使いを、実際に文字を刻すことによって感覚をつかみ、臨書する。また、刻された書を拓本たくほんに採ることによって書が広く時代を超えて学ばれてきたことを知る。

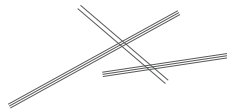
学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

点画てんかく／起筆きひつ・送筆そうひつ・収筆しゅうひつ／転折てんせつ／筆使いひつづかい／拓本たくほん

## 仏像の由来を伝える造像記

「造像記」とは、仏像を作る際にその発願者、製作の由来等を仏像の傍らに刻したものを言う。

北魏時代から盛んに行われるようになり、世界遺産にも指定されている龍門石窟に刻された龍門造像記はその代表である。その中でも495年に刻された「牛欄造像記」は、製作年代がわかる龍門造像記中では最古の作例。息子の牛欄を亡くした母親が、冥福を祈って仏像を作らせたときのもので、その書風は気迫に満ち造像記の代表作の一つにあげられる。



## 今回のお手本



牛欄造像記  
(北魏時代 495年)

(拡大版は16ページ参照)

## さまざまな石碑

中国には北魏の龍門造像記のほかにも、さまざまな刻された書が残されており、西安碑林博物館には、書の文化遺産として2千点以上の石碑が収集されている。また、同じ北魏時代には山の斜面の自然石に直接刻された書もある。その中でも鄭道昭<sup>ていどうしょう</sup>の「鄭羲下碑」<sup>ていぎかひ</sup>は最も有名な作品である。文字は雨や風にうたれて風化し、自然の中に置かれた長い年月を感じさせる。

## 拓本の採り方

拓本とは、刻された文字などに紙を当て、写し取る方法を言う。まず、石の上に紙を止め、霧を吹いて紙をぬらして貼り付ける。乾いたタオルで水分を取りながら押さえ、文字のくぼんだ部分に紙を押し込んでいく（今回は紙の上に薄い布をかけ、その上からブラシでたたいている）タンポに墨を付けて、ポンポンと紙をたたき墨を打ち込んでいく。最初は薄く、だんだんと濃くするようにし、むらなく墨を入れるのがコツ。

### 達人からひと言！

中国では文字が生成してから、さまざまなものに刻されてきた。紙が誕生してからも、文字はずっと石に刻され、今日まで伝えられてきた。拓本によって、刻された文字が美しく写し取られ、広く学ぶこともできるようになった。その刻された書の点画の切れ味や力強さを捉えて臨書することで、その字形の特徴や筆づかいを理解し、書の表現の幅をどんどん広げていこう。



達人  
加藤泰弘

牛欄造像記

